

36

Vol.36 「扉を開いて」

“おやさまを求めて” 中山正直

Happistで  
チェック!

## 01 3くぢに踏み出す

明治20(1889)年1月13日の眞之亮様とのやり取りの後、おやさまのお身上は幾分よくなりました。

1月18日(陰暦12月25日)の夜からは、毎夜おつとめが勤められ、人々は、連日寒中をいわず水行し、真心を込めておやさまのご身上<sup>へいゆ</sup>平癒をお祈り申し上げました。そうした人々の真実をお受け取り下されてか、ご容態も落ち着かれ、穏やかな日々をお過ごしになりました。

陰暦の元旦にあたる1月24日にはご気分も大層宜しく、新年のご挨拶に来た人々に対し、おやさまより「立教以来、よく十分に練り合ってくれた。皆の心も十分に受け取っているで。」とのねぎらいのお言葉がありました。また、その後も、2月13日頃にはお庭を元気に歩かれるなど、次第に快方に向かっておられるご様子で、人々も大いに安心されていたのではないかと思います。

しかし、2月17日(陰暦正月25日)の夜になって、またもおやさまのご容態が悪くなりました。そこで、飯降伊蔵先生を通じて親神様の思召をお伺いすると、次のようなおさしづがありました。

「さあ／＼すっきりろくぢに踏み均らすで。さあ／＼扉を開いて／＼、一列ろくぢ。さあろくぢに踏み出す。さあ／＼扉を開いて地を均らそうか、扉を閉まりて地を均らそうか／＼。」

「ろくぢ」とは、大和地方の方言で、平らな地面のことを意味します。

すっきりと平らな地にならすのに、扉を開いて地をならすか、扉を閉めて地をならすか、との突然のお問いかけです。

人々は、その意図を十分掴み切れぬまま、扉を開いた方が陽気でよかろうと、「扉を開いてろくぢにならしくだされたい。」と答えました。すると、その答えが親神様のご真意に沿うたのか、飯降先生の伺の扇がさっと開き、「…一列に扉を開く／＼／＼、ころりと変わるで。」とお言葉がありました。

## 02 明治20年陰暦正月26日

明けて、2月18日は、陰暦正月26日に当たります。

陰暦の26日は、以前から毎月おつとめを勤めてきた日です。この日におつとめを勤めることの大切さは、先だってからのお仕込みもあり、人々も重々承知していましたが、それでも尚、おやさまのお身上<sup>おもんばか</sup>を慮り、早朝、おやさまにお伺いなされました。

すると、「それについては、もう前々から繰り返し諭してきた通りである。今という時に至っては、もう尋ねているような時ではない。」という意味のお言葉がありました。さらに、正午ごろになって、おやさまのお身上が急変なされます。

この差し迫った状況に、一同の心もまったく定まり、ついに眞之亮様より「もし警察よりいかなる干渉があっても、命捨ててもという心の者のみ、おつとめせよ。」とのお声が掛かりました。

お屋敷では、慌ただしくおつとめの準備がなされます。つとめ人衆の面々は、いつ拘引されても良いようにと下着や足袋を重ねて身に付けました。

眞之亮様は、村の総代を務めていた隣家を訪ね、もし自分たちが拘引されれば後の事をよろしくお願いしたいと依頼され、また、お屋敷でも3名の者が家事取締り役となり、万一の事態に備えられました。

こうして、非常なる覚悟のもと、午後一時頃より、ぢば・かんろだいを囲み、鳴物を入れてのかぐら・てをどりが始まりました。

おつとめに加わったのは、眞之亮様をはじめ16名。鳴物は、琴、三味線、小鼓のみです。手は揃いきっていませんが、固く心の定まった一同により勇んで勤められました。

この日の参拝者は、数千にも及んだと言われます。お屋敷は人で溢れ、かんろだいに近くの竹の結界が細々に割れてしまうほどでした。それだけの人が集まったにも関わらず、不思議なことに、この日は最後まで一人の巡査もやって来ませんでした。まさに、これこそ奇跡としか言いようのない出来事でありました。

おやさまは、御休息所でおやすみになりながら、おつとめの陽気な鳴物の音を満足げにお聞きになっておられました。

そして、ちょうど十二下りの終わるころ、少し変わったそぶりをなされたので、お付きのおひささんがお水を差し上げると、三口召し上がりしました。続いて、おひささんが「おばあさま」と呼びかけられましたが、もう何ともご返事がありません。

おやさまは、北枕西向きで、片方のおひささんの胸に当て、もう一方をご自分の胸にのせ、そのままやすやすと眠るように現身をお隠しになられました。

明治20年2月18日、陰暦正月26日の午後2時頃。御年90歳であられました。